

学位論文題名

マーシャル経済生物学の中核としての有機的成長論
—経済と人間の共進化—

学位論文内容の要旨

本研究は、アルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall 1842-1924) の経済学体系において、近年注目されるようになってきている、経済生物学の解明に焦点をあてたものである。

マーシャルといえば、部分均衡論者、そして新古典派経済学の創始者として位置づけられてきた。しかし、彼にはもっと別の、かつより重要な側面がある。それこそが、経済生物学という体系である。この経済生物学の解明と、その中核となるのが有機的成長論である、ということを確認することが、本研究の課題である。有機的成長論とは、マーシャルが貧困労働者問題、そして救貧法対策として考えていた解決策の理論的な終着点である。具体的には、経済と経済主体たる人間の共進化を描く理論のことであり、貧困問題を根本から解決するための理論になっている。これを包含する経済生物学を含めて、マーシャルの経済学体系は一つとなる。このように、マーシャルの経済学者としての評価をより正確なものにしたい、という学史家の使命と、これからの経済学、特に持続可能な成長ということが求められている時代に、有機的成長論が参考になる理論であろうという関心から本研究は出発している。

そのためにもまず、第一章においては、経済生物学と有機的成長論に関する先行研究をそれぞれ整理する。経済生物学に関しては、経済学における生物学的アナロジーの役割に注目した研究が多いので、マーシャル経済学体系におけるアナロジーとしての生物学についても整理しておく。有機的成長論に関しては、日本人研究者の先行研究が豊富にあるので、なるべく多くの文献から整理を試みた。本論文による有機的成長論の評価は第五章でまとめることになるが、先行研究との違いが明確になるだろう。

続く第二章では、マーシャルの経済学体系と貧困問題について取り扱う。均衡論者、あるいは新古典派経済学の創始者としてのマーシャル評価は、一面的には確かに正しい。しかしながら、マーシャルと貧困問題の関係を考慮すれば、それが一面的でしかないことは明らかになり、また重要な一側面を見逃していることがわかるだろう。貧困問題への関心なくして、マーシャル経済学体系も成り立ちえないのである。ただし、マーシャルは貧困問題の解決策として、直ちに有機的成長論を完成していたわけではなかった。生物進化論から有機的成長というタームを持ち込んだものの、それによって貧困問題を経済学的に解決する理論に辿りつくまでには、『原理』の成熟を待たなければならなかったのである。第

二章では、貧困問題に対する初期のアプローチ法について考察している。

そして第三章において、マーシャルがどのように有機的成長論を完成させていったのかを考察する。本論文では、マーシャルの有機的成長論は、『原理』第5版（すなわち1907年）で完成したと推察している。多くの研究者が言うように、マーシャルはたとえ有機的成長論のような理論を考えていたとしても、それは『原理』とその続刊を刊行し終わった後に出版する著作のテーマだったのであり、『原理』にその実体を展開するつもりはなかったのかもしれない。しかし、現実問題としてマーシャルが残りの人生と仕事の進捗状況を考えたときに、彼は「進歩」に関する著作の刊行は諦め、『原理』の第5版以降、そこに残すことを決めたのかもしれないし、意図せずして残ったのかもしれない。『原理』第4版と、それ以降の長い沈黙を破って出版された『原理』第5版との違いなどに注目し、この問題について考察を進めていく。

第四章は、本論文のメインとなる、有機的成長論の内容について考察をしている。有機的成長論の構造について理解するためには、「経済騎士道」と「生活基準」という二つの重要な概念を理解しなければならない。この両概念は、純粋に経済学的概念とは言い難い。そしてそれゆえに、多くの研究者によって取り上げられはするものの、有機的成長論の構造解明には繋がらずにきたことが考えられる。本論文で明らかにするように、これら両概念は、有機的成長論の両軸として紛れもない経済学的概念であるのだ。「経済騎士道」は経済の成長に、「生活基準」は人間の進歩に必要な概念であり、両者が相互に影響を与えながら共進化していく構造こそが、有機的成長論の要であると言える。

最後に第五章で、有機的成長論と経済生物学の関係について考察する。マーシャルの経済生物学については、多くの先行研究のようにアナロジーとしてのみ捉えるのではなく、方法論としても捉えることができる。そのためには、スペンサーからの影響を十分に考慮して解釈する必要がある。それを踏まえたうえで、経済生物学とは有機的成長論を中核に持つ、マーシャルの経済学体系の一部であることが示されるだろう。マーシャルが目指した貧困問題解決のための経済学、それを研究するわれわれ経済学者が目指すべきメッカは、やはり経済生物学にあると言えることが示されるだろう。

学位論文審査の要旨

主査 教授 西部 忠
副査 教授 西沢 保 (一橋大学)
副査 教授 江頭 進 (小樽商科大学)

学位論文題名

マーシャル経済生物学の中核としての有機的成長論 —経済と人間の共進化—

本論文 (A4版全78頁, 目次, 第1章~第5章, 参考文献を含む) は, 新古典派経済学 (ケンブリッジ学派) の創設者であるアルフレッド・マーシャル (Alfred Marshall 1842-1924) の有機的成長論を経済生物学の中核として位置づけ, その内容と意義を経済学説史的な手法によって解明しようとするものである。

第1章では, 経済生物学と有機的成長論に関する先行研究のサーベイを行っている。有機的成長論は日本ではこれまでしばしば注目されてきたが, 欧米ではそうではなかった。マーシャルの『経済学原理』序文における「経済学者のメッカは力学的経済学ではなく, 経済生物学である」という言葉の真意を探求していくと, Thomas (1991) など代表的な先行研究が述べるように, 経済生物学は単なる生物学的アナロジーではないこと, マーシャルの経済学体系には経済生物学が含まれており, またその具体的内容が有機的成長論であることが理解される。この点を論証するのが本論文の目的である。

第2章は, マーシャルの貧困問題に関する取り組みについて考察する。マーシャルを心理学から経済学へ向かわせた動機は, 貧しい労働者階級の人々の生活の質を改善しなければならないという強い義務感 (彼自身の言葉で言えば, 「生活の質に関する現実的な緊急性」や「貧しい人々の顔」) であった。マーシャルは, 経済学を始めた当初の『産業経済学』(1879) では, 経済成長が貧困問題の解決への一番の近道であると考えていたが, そのような考えが徐々に変わっていき, 経済成長ないし所得分配がそうした問題の解決として十分ではないと考えるに至った。有機的成長論はその結果として生まれたのである。

第3章は, 有機的成長論がどのようにして成立したかを論じている。先行研究の多くが, マーシャルは有機的成長論を具体的なものとして構築することはなかったと考えている。これに対して, 本論文は, 『原理』第4版(1898)とそれ以後の長い沈黙を破って出版された第5版(1907)との異同を精査することで, マーシャルは『原理』第5版で有機的成長論を完成させたこと, その際の重要な転換点となるのが1907年の公刊論文「経済騎士道の社会的可能性」における「経済騎士道」概念の導入であったことを主張している。ただし, その「完成」は意図的なものではなかったのであり, また, マーシャルが『原理』第5版を出版した時点で続巻として出版することを諦めていなかった「進歩に関する著作」をたとえ完成させていたとしても, それが『原理』第5版の有機的成長論と同じものであったわけではないだろう。

では、有機的成長論とは一体どのような理論なのか。第4章は、本論文におけるこの中心的な問題を考察する。「有機的成長論」とは、『原理』第4編第8章「産業組織」における有機体（組織）の分化・統合や同13章における代表的企業のような生物学的アナロジーとしての「有機的成長」とは異なり、主として『原理』第6編で議論されるような、経済の進歩と経済主体たる企業・人間の進歩の共進化構造を描く超長期の理論である。それを支える2つの重要な概念が「経済騎士道」と「生活基準」である。「経済騎士道」とは、成功した企業家が事業と富の使用において持つべき精神、「卓越性への欲求」を追求し、公共性を持って活動する態度であり、経済の進歩をもたらす。他方、「生活基準」とは生活の質を表す活動と欲望の基準であり、人間の進歩に必要な概念である。

労働者の生活基準は、教育・賃金・余暇の増大によって上昇するが、そのためには経済騎士道を備えた企業家の存在が必要である。また、経済騎士道の普及にはその正当な評価が必要であるが、それは名誉法廷たる世論の担い手としての労働者階級の道徳的改善に依存する。こうして、相互依存的な両概念による経済と人間の共進化構造を経済学的アプローチとして描くことができる。もし、「経済騎士道の普及→生活基準の改善→労働者の道徳的改善→名誉法廷の形成→経済騎士道の普及」といった正のスパイラル的な発展が生じれば、経済成長が達成されて貧困問題が解決されるとともに、人間の進歩が達成される。有機的成長論による貧困問題の解決こそがマーシャルが経済学に求めた方法であり、マーシャルの救貧法に対する回答でもあったのである。

最後に、第5章では、改めて有機的成長論と経済生物学の関係について考察している。マーシャルの経済生物学は、多くの先行研究のように単なるアナロジーとしてではなく、方法論として捉えることができる。そのためには、主体の内部構造とその環境との共進化から社会有機体の発展を説明するスペンサー理論からの影響を十分考慮して解釈する必要がある。マーシャルは、人間の性格が変化する超長期において、生産と消費、そして分配と交換の一般的諸条件に質的変化が生じると考えている。マーシャルの経済学体系では、有機的成長論は、理論的装置としての力学的経済学と歴史的時間を考慮に入れた超長期の理論とをつなぐ理論的な架け橋である。経済生物学とはこうした有機的成長論を中核に持つ、マーシャルの経済学体系の一部である。マーシャルが目指した貧困問題を解決するための経済学と、それを研究する経済学者が目指すべきメッカは経済生物学にあると言える。

本論文は、国内外のマーシャルに関する先行研究を批判的に吟味した上で、1) マーシャルの経済学体系には経済生物学が含まれており、その具体的内容が有機的成長論である、2) 有機的成長論は貧困問題への解決として生み出された、3) 有機的成長論は、経済の進歩と経済主体たる企業・人間の進歩の共進化構造を描く超長期の理論であり、経済騎士道と生活基準という概念によって構成される、4) 経済生物学は単なるアナロジーではなく、方法論でもある、といったオリジナリティの高い自説を積極的に提示し、そうした主張を学史的な文献考証を踏まえながら説得的に論証している。もちろん、有機的成長論と『原理』の続巻とされている「進歩に関する著作」との関係の解明などが今後の課題として残されている。とはいえ、本論文は、有機的成長論の内容を明確化し、それを中核とする経済生物学をマーシャル経済学大系の中に整合的に位置づけて首尾一貫した説明を与えており、意欲的で独創的な研究として高く評価できる。よって、本論文は本経済学研究科の課程博士（経済学）の学位を授与するに値すると判定した。